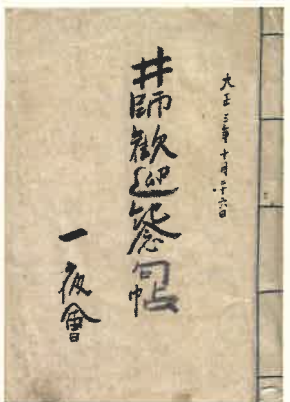


山口県と初期の『層雲』

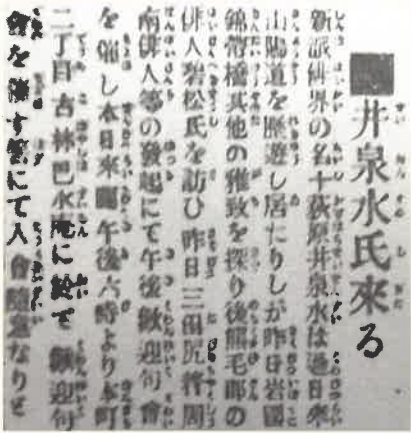
(明治44年～大正15年)

『層雲』は創刊されて約5年ほどで井泉水主宰の自由律俳句誌として本格的に始動する。再び盛り立てていくため、創刊時から投句をしていた面々の力を借りて『層雲』の運営は次第に軌道に乗って行く。自由律俳句の普及の為、井泉水は全国各地に足を運んでいた。『層雲』のなかでも比較的早い段階で句作に励んでいた山口県の若者らの元も訪ね、交流を深めていったようである。

左は大正3年10月26日、田布施にて催された歓迎句会の関連資料である。



「井師歓迎記念句帖」
田布施町郷土館 所蔵



大正3年10月28日
「馬関毎日新聞」山口県立図書館所蔵

【大正期】山口県内の『層雲』同人たちについて

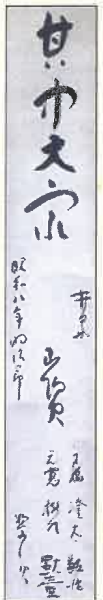
- 明治44(1911)年
 - ・8月、熊毛郡田布施町麻郷にて二夜会結成。
- 大正元(1912)年
 - ・「白兔会」(防府)、「関門俳句」(下関)が『層雲』に登場。
- 大正2(1913)年
 - ・「椋鳥会」(防府)、「茅花会」(徳山)が『層雲』に登場。
- 大正3(1914)年
 - ・10月、田布施、防府にて地元の人々らによる萩原井泉水の歓迎句会が催される。
- 大正4(1915)年
 - ・吉敷郡嘉川村にて「双葉会」結成か。
- 大正5(1916)年
 - ・田布施町麻里府でも句会が催されるようになる。
- 大正6(1917)年
 - ・三島会(防府)、島の会(佐合島)が層雲に登場。
 - ・6月22日、横浜在住の同人・芹田鳳車が柳井を訪ね、藤田文友や白船らの歓迎を受け句会が催される。下関でも同様の歓迎を受ける。
- 大正7(1918)年
 - ・7月、萩町の「精華吟社」が俳句誌「精華」を発行。
 - ・小郡で「エメラルド吟社」結成か。
- 大正12(1923)年
 - ・「二夜会」が中心となり『層雲』『海紅』の合同句会が柳井にて行われる。『層雲』同人で陶芸家の内島北朗の作品展併催。

其中庵生活前

(昭和7年9月20日～昭和10年8月)

昭和7年9月、種田山頭火は小郡の知人らの助けを借りて山裾にあった廃屋を改装し「其中庵」と名づけて6年ほど暮らした。結庵後の山頭火は庵の脇に畑を作るなど自給自足の生活をめざしていたようである。

昭和8年11月2、3日小郡では井泉水の歓迎句会が催された。2日は町内の旅館で俳談、3日に其中庵の裏山で松茸狩りなどを通して交流の後、句会が催されたようである。左の写真はその句会での寄せ書きである。徳山、下関、広島から訪ねて来た同人らの名前も見うけられる。



「其中大衆」右上に井泉水、中央に山頭火、右下から白船、澄太、敬治、元寛、樹明、黙壺、黎々火の署名入りの軸【個人蔵】

穏やかな日々を送っているように思われた山頭火であったが、昭和10年8月に服毒自殺を図る。結局失敗に終わるが、この年の末には「死に場所を探すため」の旅を決行し、約半年間東上の旅の中であった。その間『層雲』内で交流のあった知人らの元を訪ね、句会を行う等文学的には非常に充実した旅であったようだ。しかし当初の目的を果たせぬまま帰路につく。途中、福井県の永平寺で5日間山籠もりをして其中庵へと帰っていく。

其中庵生活後

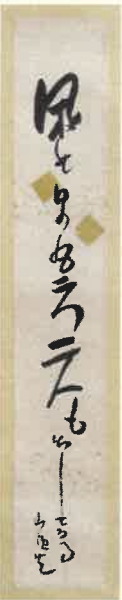
(昭和11年7月～昭和13年11月)



▲山口駅の様子を報じる記事
昭和13年7月12日「防長新聞」
山口県立図書館所蔵

昭和13年7月11日、山頭火は山口に出かける。この日、山口駅周辺では戦地から無言の帰還を果たした地元の青年たちを迎えていた。山頭火はこの光景を目の当たりにして涙を流したという。

山頭火は、この時期、愛国婦人会に作句依頼をされていたこともあり戦争に関連する句を詠んでいる。



・昭和13年秋 湯田へ移った頃に揮毫した句
「嵐の日の九二人も出してゐる」山頭火

海を越え広がる『層雲』の活動

『層雲』は創刊以来、国外でも支部が作られ盛んに活動していた。なかでも自由律俳句を米国に広めた人物・下山逸蒼の存在は大きい。彼は『層雲』創刊から晩年まで遠い異国の地で仲間とともに自由律俳句の普及に力を注いでいた。



下山逸蒼 しもやまいっそう
明治12(1879)年～昭和10(1935)年
盛岡市出身。(盛岡市先人記念館所蔵)

逸蒼は明治36年10月に渡米して以降、職を転々としながら句会を設立し、邦字新聞の俳壇指導などを通して米国在住の日本人らと交流を深めていたようである。目覚ましい活躍をしていた逸蒼であったが、昭和10年、日本へ帰国することなく米国でその生涯を閉じた。

井泉水は、昭和12年6月～8月の約80日間、ハワイ、北米で活動する『層雲』同人たちを訪ねた。「米国を訪ねる」という逸蒼とのかねてからの約束を実現させたのである。井泉水は渡米中に層雲社宛てに書信を送っている。米国での井泉水は句会に講演会、また現地の同人らと吟行するなど充実した日々を送った様子がうかがえる。

▼昭和12年6月、ハワイにある日本料亭で行われた句会の様子【個人蔵】



『層雲』北米同人と山頭火の交流

山頭火が書いた日記から推測すると、最初の交流は昭和11年に北米同人社「ポピイの会」の片井溪巖子(かたい・けいげんし)が山頭火の個人句集を購入するために代金を送ってきたことがきっかけであったようだ。日記には翌年頃から「ポピイの会」と贈り物の交換をしていた様子も見られる。

本企画展では昭和13年、北米「ポピイの会」の同人・大月喜三郎氏が山頭火に宛てた手紙を展示している。

※昭和11年7月号の『層雲』には北米オークランドの自由律俳句会として「ポピイの会」が結成されたという記事が掲載される。

山口県と初期の『層雲』

其中庵生活前 其中庵生活後

海を越え広がる『層雲』の活動